

程他の影響を受けて居なかつたものであらうか、自分は支那印度の言語文物と祕史に見ゆるそれとの關係に於ては、ほゞ那珂博士の論斷に従ひたいが、祕史の言語をどこ迄も他の影響を受けない獨立の蒙古語と見、またその文物を蒙古固有のものとするに於ては、多少の疑問を有して居る、今これについて細かき論證をする前に、先づ當時の蒙古族について一般的の考證を施して見る。

由來政治的勢力の變化甚しい漠北の地では、蒙古族が勢を占むるに至る迄には幾多の勢力が興亡したが、此の興亡の勢力を作つたものは蒙古・ツングース・トルコの三種族と見て差支ない、此等の三者が次ぎ／＼に興り、その支配せる勢力を倒して之に代つた際に、新たに興つたものは能く固有の文化を支持し、もしくは新たに作り出したものであらうか、それとも前者の文化を受けて襲踏するに至つたものであらうかは、注意して見なければならぬことである、若し此等の民族の間に詳細なる文獻が存して、相互の文化を比較し得るならば、かゝることは深く考へる迄もなく解釋し得ることであらうけれども、僅かに主として漢史の中に含まれて居る零碎な記録に頼つて、その史蹟を探るより外なき状態であるからして、一層此の點に意を用ゐなければならぬ譯である、蒙古部の名は既に唐代から見えて居るにしても、彼等が著しき勢力を現はしたのは成吉思汗の時からのもので、こゝに至る迄の何百年かの間は、言ふ迄もなく室韋の一部として、極めて微々たる勢力を有する未開の一部に過ぎなかつたことは疑ふ可き餘地はない、成吉思汗鐵木眞の時に及んでも、尙ほその初めは他の小部落との小争鬭を事とし、家畜の掠奪・婦女の劫掠等を懸命の仕事として、然も時には逃匿し、時には捕虜となつた程のかよわき有様に過ぎなかつたことは、